

幼児教育における基本的なるもの

篠崎謙次

幼児教育論 ①

△一▽

人間の性格は幼児期にその基礎がきつかれるということは、今日一般にみとめられた教育的な原理とされている。このことはすでに幼児時代に人間としての最初の本質的な基底、すなわち人格のめばえがあらわれ、その基礎構造がつくられつつあることを意味している。いわゆる三ツ子の魂である。この時期に幼児は対人対物関係において、自己の欲求や好き嫌いを着地のままにあらわし、いわば無防備のまる裸の自己をぶっつけていく。幼児は自己の心をいつわることができなない。教師や仲間との接触においてこれほど自己自身をあらわにした接し方は他の時代には存在しないのである。この意味で幼児期の教育は、他の時期の教育のあり方に比し、一層人間として直接の真実なふれ合いであり、根源的な基礎的な人間教育（魂のふるさとを求める教育）であるといわなければならないのである。このような意味で幼児期の教育は、人間としてもっとも根源的なもの



の、それなくしては将来の人格形成がゆがめられてしまうような基本的なもの、核になるようなものを把握してこれを育てていくことこそ重要視されなければならないであろう。

それではこのようなぎりぎりの基本的なものとは何か、と問われる場合、今日の幼児教育においてそれは必ずしも一義的に明白ではないといつてよいのではあるまいか。われわれは幼児期の発達が身の各方面において未分化から分化へときわめて多彩にかつ急激にあらわれることに目をうばわれ、その中でなにが基本でなにが枝葉であるかはつきり区別することができなくなっているのではないであろうか。幼児の感覚・運動・表現・社会性・科学性など、現われ得るすべての能力を、のびるだけのばしてやればよいという汎能力主義の夢を画いているのではあるまいか。

植物の成育の過程において、側芽が伸びすぎたために主芽の実がみのらなかつたり、枝が徒長し葉が茂りすぎて、日光をさえぎり空気が

の流通を悪くして病菌に犯され易くなって、木そのものの成育がさまたげられたりする。若木に早くみのりをいそぐと木の活力がおとろえ、あとあとまでよい結果が得られない。枝葉にとらわれて根幹を太らせないとよい木は育たないのである。幼児期もちょうどその根や将来幹になる部分を大事に育てる必要がある。それでは幼児期の発展においてどのような能力が根や幹になる部分であるだろうか。

八二 V

人間はその一生において生物的発展・情意的発展・社会的発展・知的発展などをなしてあげている。これら諸方面の能力が自我の情意によって統一されながら発展し、そこに性格が固まっていきパーソナリティが形成されると考えられる。したがってこの四方向は人間が全人的な人格体として育っていく基本であり、そのいずれの一方が欠け、もしくは未発達に放置されても全体としての人格はゆがめられるのである。またそれらお互いの領域がバラバラにもしくは矛盾に満ちて形成されても、統一ある人格は育ち得ないことは明らかである。

ところで幼児期において、これら基本的な発展の姿をとらえてみると、そのいずれにおいてもいまだ芽生えの時期であるといえる。したがってそれらの基礎的な芽生えを幼児時代の特質において、よく調和され統一されながら発展するよう導かれなければならない、ということである。教育とはそれぞれの時期の発達特質を満しなが

ら連続発展していくものであるから。ところで調和的というと、どれもこれも平均に、平等にのばしてやるというように考えがちである。調和的とは決して算術平均的な平等を意味するものではない。その時代時代に強調されている発達の特質にもとづいて、これをダイナミックにとらえていかななくてはならないということである。

それでは幼児期における発達の特質、その機制はどのような姿をしているものであろうか。

1 人間の生命はすべての時期において生物的発展によって維持されていることは当然であるが、特に身心の機能が充分に分化していない幼児期においては、彼らの生活活動の大部分は生物的な力に依存しているのである。このような力の中から身体的、精神的機能が分化してくるといってよい。したがって幼児にとって生物的な能力の発展——それは生活力の根源である——はすべての能力分化の基盤であり培養土であるといえる。

2 幼児の精神構造は著しく情意的色彩(特に情緒および欲求)にいろどられ、情意の働きに作用されながら発展する。

3 幼児の社会的性格や知的活動もいちじるしく情緒的なムードにつつまれて働くものであり、表現活動などは情緒や欲求の表出そのものですらある。したがって情意的作用は幼児の自我活動を全体的に左右し方向づける基底である。このような精神活動の条件を無視すれば、幼児的特質は失われ、ひねこびたおとならしい知識や単なる社交性・おませな表現などが支配するようになるのである。

4 社会性や知的活動も幼児期における精神の基本構造をなしている。けれども彼らの精神活動は全体として情緒的モードにつつまれながら発展する。このようなモードの中で社会性や知的活動が芽を出し発展してくるのである。彼らは対象を情意的気分(自己の欲求や好き嫌いなどの)からきりはなして思考することができない。その精神活動はきわめて主我的・主観的な方向に働いているのである。したがってこのような情意的ヴェールをはがし、社会性そのもの、知性そのものをとり出そうとすることは不自然であり背のびである。それ(社会性そのもの、知性そのもの)は情緒的な霧が次第にうすれていく幼児期のおわり頃から徐々にとりあげられるべき問題である。

これらを一般的全体的にみるならば、幼児期においては知性も社会性も表現能力もすべて情意的な精神活動と結合しながらその基本を養うことが必要である。

以上のような考え方から、幼児の生命力や全体的な活動力を支えているものはまずもって生物学的な力であり、この能力を力強く充実してやるのが、第一に要求される幼児教育の基本でなければならぬ。

第二に幼児の精神活動はすべて情緒や欲求にまわりつかれて発動する。それが幼児的精神構造の特質であり、将来の性格を形成するおおかたの基はこの点に存在すると思われるのである。したがってこれらの情意的活動を正しくゆたかに育ててやるのが、幼児教

育における第二の基本的な課題となるのである。

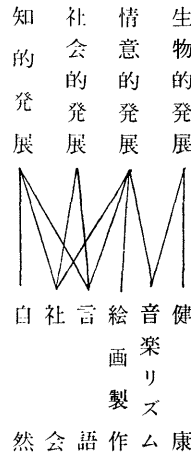
第三に社会性・知的発展・表現能力などもこの時期に急激多様な発展をとげる。したがってこれらの能力も幼児の精神の基本的な構造をなしている。しかしこれはあくまでも生物学的発展・情緒的發展を基本の基本とした立場から取り扱われ、それを肥料とし、養分として吸いとりながら育てられることがのぞましいということである。科学性とか社会性というような使い方も右と分離した意味で用いられるならば、それは幼児教育において枝葉に属する問題となるであらう。

△三△

以上わたしは幼児教育を人間発達の一つの過程としてながめ、将来の性格発展の土台となるようなもの、そこからパーソナリティがゆがみなく発展してゆく基礎になるようなもの——このような力をきづいてゆくことであると考えた。そしてこのような意味から発達上の特質を満たし、この時期でなければ養い得ないもの——それなくしては後々の発達がゆがめられたり悪影響をこうむるような根本的なものを重視する立場をとってきたのである。このような立場から幼児教育の現実をながめるとき、そこにいろいろな問題があらわれてくるようにおもわれる。

それではすでにのべた生物学的・情意的・社会的・知的などの各方面の発展と現在行なわれている保育内容の六領域とはどのような関

係があるであろうか。それをとり出してみると次のような関係になる。



以上は一応の直接的な関係としてとらえてみたものである。したがってそれらは表面では互に無関係と思われる部分でも裏面では縦横に影響し合い、とくに根の部分では生物的な力としての健康やあるいは精神の動力源である情意的な働きによって、生き生きと生命的ないぶきを与えられてむすはれているといつてよいのである。このような考え方に立ちながら幼児教育の内容・方法的な面について問題となるところをひろいあげてみよう。

(一) 生物的發展(健康・リズム動作など)について

活動へのエネルギーを与えるもの、それが生物的發展である。この方面は実際には主として健康領域として指導される。従来幼児期は身心ともに軟弱な時期として専ら保護することに重点がおかれ、保育ということは伝統的に使われてきた。このような意味で幼児期の教育は、あまりにも女性的・母性的なものが支配していた。活動の根源としての生物的發展——いわゆる健康生活の指導面などで

は、もっと父性的なもの、野性的なたくまじさが必要かと思う。このためにはさらに次のことがらが重視されねばならない。

1 活動欲を十分に満足させる

栄養・休息・衛生などの指導はもちろん大切であるが、もっと幼児本来の活動欲を十分に満足させてやるような内容や指導が大切ではないだろうか。それも素朴な形で行なわれる各種の大筋運動——とくに素朴に歩くこと・走ることを中心とする練習が不足していると思われる。それは多くの場合遊戯室の中でスキップなどを行なうというリズムの指導に集中され、しかも幼児が交互に出て行なう方式で取り扱われるため、腰かけて待つ時間の方が多く、実際に活動するのは二、三回で終わってしまう場合が多いことである。もっとみんなが同時に、または継続的に歩く練習——坂をよじのぼりかけおり、木の間をくぐったりめぐるたりまたぎ越したり跳び下りたりという素朴な動作を練習する必要がある。このためには園内の環境や指導上の工夫が必要である。

2 上にじかにふれる機会を多くする

太陽と土と水、それが子どもを健康に育てる要素だといわれている。とくにわれわれの生活が都会化すればするほど人間は急速に土から隔離された生活を余儀なくされる。大都会の子どもたちは今日幼稚園の砂場が唯一の土と接する機会になっている。砂場は幼児の花園である。なるべくこの時代に多く土にふれさせ、気候のよい時は、はだして土の感触を味あわせるべきである。トロンコ遊びも大

いに推進すべきだ。きたないとか着物がよごれるとか嫌とかにとらわれて、きれいなことだけにおわつてはならない。むしろ着物を着替える習慣、ドロンコの身体を洗うよい躰の機会とすべきである。

3. 戸外保育を重視する

以上のようなことは自然に戸外保育を必要とすることになる。せまい遊戯室から出て太陽と大気を吸いとり土の感触を楽しみながら子どもの活動意欲をみたりやり、野性的な香りをすわせる。野性の回復——今日の都会化した幼児の生活に大切な要素である。

(一) 情意的發展(音楽リズム・絵画製作・言語・社会)について
幼児は自分の対象となる人や物についてすべて情意的にとらえる。一つの棒切れも、それをもって遊ぶ道具、自己の意欲を満し気分を満足させてくれる価値ある物としてとらえているのである。ここでは自己の欲求とは別に単なる物質として、それがどのような構造や性格をもつかは幼児には何のかわりもないことである。したがって幼児は自己の欲求や興味・好き嫌いなどという情意作用と引きはなして対象をとらえることはできない。このような特質が主観的で自己中心的な思考活動を生み出しているといつてよい。

しかもこのような情意作用は何らかの意味で表現されなければならぬ。そこに言語・音楽リズム・絵画製作・遊戯・劇化などの活動があらわれてくる。遊戯が遊戯することそのの中に目的をもつといわれるように、表現活動も幼児自体表現できたという動作そのものに喜びを感じている。いわば活動そのものの中に全自我を表

出して喜びを感じているのである。

このようにして幼児の表現活動は、いまだ美のために表現するのではない。ましておとならしい既製の美の観念でワクつけしては、生き生きとした情意は育たない。このことは絵画的表現活動にもっともよくあらわれている。たとえば幼児は自分の画いた軍艦の絵から「ドンドン」と大声で叫んで勢よくタマを飛び出させる。火事は「シューシューポーポー」と大声で燃えながら真紅にぬられ、大好きな消防自動車は「ジャンジャンジャンジャン」と音を立てながら形が画かれる。また好きなお母さんの顔は愛らしく、叱られたり欲求を満たされなかった時のお母さんは×で消してしまったり真っ黒くぬりたくってしまう。彼らは心内に感じている情意の動きをありのままに表現しているので、決して美意識をもって美を追求していいるのではない。一部の教師や親達はそれをただだけ上手にかけたか、美しいかというおとなの価値意識からのみ批判しようとする。かくて幼児の表現活動は、決して美のため芸術のための基礎教育ではなく、彼らの精神の表出活動であり、ゆたかな情意を表現したり育てたりが目的である。情意を育てこれをゆたかに表現する教育である。したがって次のことを重視することがのぞまれる。

1 意欲を育てこれをいろいろな面に実践したり表現したりする力を養う

2 愛情への喜びを感じさせる

仲間や身近な人、まわりの生物・無生物などに対して愛情を感

じさせ、愛するよろこびを味あわせその表現の仕方を多方面において学ばせる。

3 生命をおびやかすものへの素朴なおそれ、いかりを感じさせる

右のような精神活動が人間性の基底であり、核とするものだと思う。根本的に愛情なき人間は人間として育ち得ないからである。

(三) 社会的発展(社会・言語)について

もちろん生活を自立させていく躰は大切である。しかしそれだけでは将来人間性をめざましていくような基底を養うわけにはいかない。ここでは情意的発展と密接な関係をもって、人間性の基礎となり、道徳性のめばえを養うように善性を育てることが切望される。

1 差別感なくしていく

まだすべての人が平等であるというような積極的な意識はない。少なくとも仲間を物質や才能や親の地位やその他理由もなく差別したり蔑視したり——このような意識から仲間はずれにすることがいちばんいけないことを指導し正義感の芽を育てることが必要である。

2 弱いものいじめをしない

高等動物の集団生活の中で、強者と弱者との支配↓被支配の関係が成立しているように、幼児の世界も体力がありすばしくて生活力旺盛な子がボスの役割りをはたし、他は力に応じて順次支配↓被支配の関係がつけられる。強いものにいじめられた子どもは、自分

よりさらに弱い子を泣かす。泣かされた子の欲求不満は、さらに一段弱い子に向かうという傾向があらわれる。弱いものいじめるとは人間として一はんくずであることを、実感として幼少の頃から徹底的に指導すべきである。

3 いわゆるい、い、わる、しない

気に入らないからといってつきとばしたり髪の毛を引っばって泣かしてみたり、物をかくし、遊びのじやまをしておもしろがったりする、小暴力の芽が三歳前後にあらわれ易い。これらは家庭でいつも欲求や情緒がおさえつけられていたり、活動欲が満たされなかったり、自分がみとめてもらえなかったりする場合に多い。このような場合十分に原因となるものをみきわめ、これを解消し仲間を愛する(仲間にとめられながら)このよろこびを経験させたい。ひとにいじわるしめいわくをかけて平気でいたり、喜んだりすることがゆがんだ無感動的性情をつくるものになるのである。

4 協力・協同による・共感の情を味あわせる

一人でできないことが、みんなでできた、みんなで同じ気持ちになった、同じ経験にひたった、このよろこび。それが無意識的にもあとあとまで楽しい心の感動をよびおこす。愛情をもとにした協力、協同の体験と共感の感情——これらは人間性発展の基礎であり幼児時代における道徳性の指導であるといつてよい。

四、知的発展(自然、社会、言語)について

よく幼児の合理性・科学性ということと情緒性ということが問題

とされる。わたしはすでに幼児的精神構造の特質として情意的性格を重要視してきた。このことはしかし科学性のめばえを否定しようとするものではない。たゞ科学性といつても、科学性だけが独立してあらわれてくるものではない。すでにのへたように情意的な働きの中からむしろそれに刺激されて出てくると考えられる。たとえば▲きれいな花をとりたい↓しほむ▽・▲金魚を手にして遊ぶ↓死ぬ▽というような事実認知は、すべてもと情意的なものから出発して、知識はその過程においてあらわれてた認知である。子どもには食べたい果物、遊びたいおもちゃ、ころがしてみたいトングリがそこにあるのであり、それと切りはなされた果物の色や形、性質があるのでなく、またおもちゃの構造そのものがそこに存在するのではない。したがって

1 事実知・生活知を重んずること

子どもの生活の中に生かされている事実としての知識を数多く経験させてやるということ、この中で考えさせることが中心となるべきで、いまだ知識を系統として与える時代ではない。すなわち知識を知識とするものとして情意的な働きからひきはなしてとらえる仕方は、一般に幼児期以後が適当である。(しかし幼児後期の頃から生活経験としてハラハラにもっている知識をある程度、まとめる意味での指導はあってもよい)

2 愛情に培われた知識であること

このようなことは矛盾したことばであるように考えられるかもし

れない。人間としての知は根本にはヒューマニズムにうらづけられた知識でなければならぬということである。幼児は知識の興味だけを強調すると、いたずらに生きものを殺して内部を切り開いてみたり、たいせつな作物や花や植木をぬきとったりちぎったりして当然のこととしている。科学者が実験動物を犠牲にするには、その底に生命に対する宗教的にも似た愛惜の情が存在する。それが人間の心というものである。科学性のめばえ、合理性の育成といういかにも近代的な人間を育てるらしいひびきのとりこになって、幼児期に育てらるべき事物への愛情を犠牲にしてはならないとおもう。ひややかな知性、冷こくな知能は人間から愛情をうばい、もつとも精密な人間機械をつくりあげてしまおうだろう。

△ 四 ▽

以上四つの面から幼児教育の基本となるようなものを考えてみたのであるが、これらは決して区切られた別々な活動ではないということである。そしてそれが幼児の精神構造の特質であるといえる。したがって方法的にも教科のように知識そのものを分類してすじ道を立てて学ばせるといふやり方は妥当でない。六領域もその一つ一つを指導の領域として意識しすぎるといつのまにか教科的な指導におちいってしまう。ある材料にとりくませ、そこから幼児の生活や経験を指導する——その過程において六領域があらわれてくるというのが自然な指導の考え方であろう。

(宇都宮大学)